

新製品発売のご案内

[ESOTERIC名盤復刻シリーズ]

ブルックナー:交響曲第8番

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番・第21番

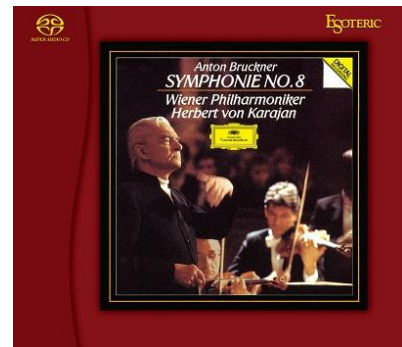
フリードリヒ・グルダ(ピアノ)
クラウディオ・アバド(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

エソテリック(株)独占販売 2018年6月8日 発売

ブルックナー:交響曲第8番

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

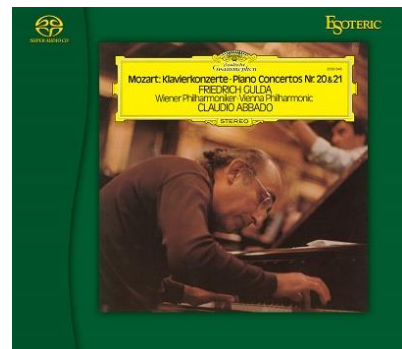
- 品番:ESSG-90181
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222049
- レーベル:Deutsche Grammophon
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:交響曲



モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番・第21番

フリードリヒ・グルダ(ピアノ)
クラウディオ・アバド(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

- 品番:ESSG-90182
- 仕様:Super Audio CD ハイブリッド
- 定価:3,611 円+税
- POS:4907034222056
- レーベル:Deutsche Grammophon
- 音源提供:ユニバーサルミュージック合同会社
- ジャンル:協奏曲



- DSD MASTERING/Super Audio CD 層:2チャンネル・ステレオ[マルチなし]
- 美麗豪華・紙製デジパック・パッケージ使用

“Super Audio CD”と“DSD”は登録商標です。

エソテリック株式会社(代表取締役社長 大島 洋)は、「名盤復刻シリーズ」Super Audio CDハイブリッド盤2作品を発売開始いたします。

今回の作品は、定評の丁寧なマスタリング作業によってSuper Audio CD化され、音質の向上はもとより、作品が本来備えた音楽的魅力を改めて浮き彫りにし、新たなる感動を約束するものに仕上がっています。この2作品はエソテリック株式会社の独占販売で、主にオーディオ販売店で販売されます。

[アルバムの特徴]



ブルックナー:交響曲第8番

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

カラヤンが生涯最後にたどり着いた究極のブルックナー解釈を刻み込んだ交響曲第8番。

■ESOTERICならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤を高音質マスターから DSD マスタリングし、世界初の Super Audio CD ハイブリッド化を数多く実現してきました。当シリーズでもカラヤンの録音はこれまで多数取り上げてまいりましたが、今回はカラヤン最晩年のデジタル録音から、ブルックナーの交響曲第8番を、世界初 Super Audio CD ハイブリッド化として発売いたします。カラヤンのブルックナーは、2012年に発売したベルリン・フィルとのブルックナー交響曲第7番、2013年に発売したブルックナー交響曲第4番以来、当シリーズとしては3枚目の Super Audio CD ハイブリッド化となります。

■最晩年のカラヤンの音楽の深化

1980年代後半に入って、クラリネットのザビーネ・マイヤーの首席採用を巡る対立を発端に、終身芸術監督を務めていたベルリン・フィルとの関係がギクシャクしてしまった最晩年のカラヤンは、ウィーン・フィルとの関係をより深めるようになりました。持病の腰痛が悪化し、指揮台に高めの椅子を固定して、そこに腰かけて指揮せざるを得なくなり、トレードマークだった「目を閉じたまま、流麗な棒さばきでオーケストラを操る」颯爽とした指揮ぶりは見られなくなったものの、オーケストラを統率する強靱な精神力には微塵の衰えもなく、逆にその肉体の不自由さがカラヤンの音楽作りにそれまでになかったある種の奥行きと深みを加えるようになりました。

■大作第8番の最後の録音

そうした時期にカラヤンがベルリン・フィルではなく、ウィーン・フィルと接近し、しかもブルックナーの交響曲の大作を取り上げたのは何かの符号だったのかもしれませんが。この交響曲第8番は、1988年11月に行われた、晩年のカラヤンが腐心していたテレモンディアル社による映像制作プロジェクトに由来するもので、ムジークフェラインザールで一部客を入れる形のセッションで収録されたものです(11月20日には同会場での特別演奏会も開催)。交響曲第8番はカラヤンがウィーン・フィルと初めて取り上げたブルックナーの交響曲であり(1947年10月の特別演奏会)、それ以来1989年まで、1959年10月の日本ツアー(同曲日本初演)、1979年のザンクト・フローリアン修道院での演奏(ユニテルによる映像収録)も含め、19回にわたって演奏しています。カラヤンは録音でもこの交響曲のパイオニア的役割を果たしており、ベルリン・フィルとの1957年録音は、同曲の最初期のステレオ録音でもありました(その後1975~81年のベルリン・フィルとの全集で再録音しています)。こうしたことから、この交響曲がカラヤンにとって重要なレパートリーの一つであったことは論を待ちませんが、このウィーン・フィルとの録音は、文字通りカラヤンのブルックナー解釈の集大成ともいべき究極の演奏というべきものでしょう。深い光沢を感じさせるかのようなウィーン・フィルの濃密な響きを最大限に活かし、雄大なスケールで作品の構成感を描き分けつつ(第4楽章の各主題やエピソードの描き分けの明解さは見事)、細

部までに血の通った表現を実現させています。カラヤンらしい流麗さは、特に第 2 楽章のトリオや第 3 楽章アダージョで際立ち、ブルックナーにありがちな低回するような晦渋さとは無縁。第 4 楽章コーダの息の長いクライマックスも、むしろそれまでのベルリン・フィルとの録音よりも淡々とすっきりとしているのもこのウィーン・フィル盤の特徴といえるでしょう。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

ムジークフェラインザールでの収録を手掛けたのは、1970年代のEMI録音に始まり、その後カラヤンの録音の専任プロデューサーとなったミシェル・グロツと、ヴェテラン・エンジニア、ギュンター・ヘルマンズのコンビ。この時期のカラヤンの録音に共通する、左右の広がりや深い奥行きを備えた音場の中で、分厚い弦と豪壮な金管の響きを据えていくバランス作りですが、ベルリン・フィルでの収録と比べると、細部のパートがより明確に際立っているのが印象に残ります。収録時間が 82 分を超えるため初出は 2 枚組 CD でしたが、2012 年には DG Originals で Original Image Bit Processing でのリマスタリングが行なわれた際に 1 枚ものとして発売されました。今回はそれ以来の、そして初めての DSD リマスタリングとなります。今回の Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整された ESOTERIC の最高級機材を投入、また MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。



■『豊麗極まりない響きの美しさと多様な表現はブルックナー演奏の極致』

「このカラヤンの最晩年の録音が、ベルリン・フィルとの録音に比べると音や表現が柔軟に感じられるのは、カラヤンの変化なのか、それともオーケストラの持ち味によるものなのかよくわからないが、両者の個性の相乗効果をもたらした最上の演奏の一つであり、豊麗極まりない響きの美しさと多様な表現はブルックナー演奏の極致といえよう。」

(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 交響曲編』、1998 年)

「カラヤン晩年の美しい、彼岸の花のようなブルックナーである。ここに聴く演奏はまさに円熟の極みにあったカラヤンの至芸であるが、しかしカラヤンという指揮者が最後まで実に端正であり続けたことを物語る凛々しい名演でもある。(・・・)カラヤンは最後まで作品の僕としての使命に徹しており、それがたとえようもない客観的調和と気品、さらには崇高さを醸し出している。そんなカラヤンの指揮にウィーン・フィルが誠意ある情熱で応えており、最初の低弦による動機から名演の予感が走る。頂点は第 1 楽章にあり、この峻厳な美しさの前にはすべてが色褪せるほどだ。ブルックナーを聴く喜びとカラヤンの偉大さを同時に知る究極の名演である。」

(『クラシック不滅の名盤 800』、1997 年)

「カラヤンが最晩年に行った破格の名演である。最晩年といっても演奏は十分な力強さと生命力を誇っており、決して枯淡の境地に分け入ったものなどではない。偉大なる作品の全貌を余すところなく再現しようとした熱意が執念となって燃え盛っており、指揮台に立つカラヤンの美学を目の当たりにするかのようだ。しかも峻厳な高みに立つだけでなく、作品がその底に持つ豊かな歌謡性、情感のきめ細やかさといったものも十分に味わわせる心憎い配慮があり、演奏はあくまでも美しく、しなやかである。」

(『クラシック不滅の名盤 1000』、2007 年)

「老境のカラヤンの心的奥深さが入り混ざったこれまでにない仕上がりとなっている。作曲者と同じオーストリア人としての共感が全てのフレーズに反映されて、一呼吸深いカラヤンのレガートが随所で聴きとれる。ウィーン・フィルもその表現を十分に心得た豊穡な響きで応えている。」

(『クラシック名盤大全 交響曲・管弦楽曲編上』、2015年)

[収録曲]

ブルックナー

交響曲第8番ハ短調 WAB108

[ハース版]

[1] 第1楽章 アレグロ・モデラート

[2] 第2楽章 スケルツォ、アレグロ・モデラート〜トリオ、ゆっくりと

[3] 第3楽章 アダージョ、荘重にゆっくりと、しかし引きずらないように

[4] 第4楽章 フィナーレ、荘重に、速くなく

ヘルベルト・フォン・カラヤン(指揮)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

[録音]1988年11月、ウィーン、ムジークフェラインザール

[初出]427 611-2(1989年)

[日本盤初出]F00G20438~9(1989年8月25日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー]ギュンター・ブレースト

[ディレクター]ミシェル・グロッツ

[レコーディング・エンジニア]ギュンター・ヘルマンズ

[Super Audio CD プロデューサー]大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア]杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング]藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説]諸石幸生 ジョン・ウオーラック(訳・寺西基之)

[企画・販売]エソテリック株式会社

[企画・協力]東京電化株式会社

[アルバムの特徴]



モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番・第21番

フリードリヒ・グルダ(ピアノ)
クラウディオ・アバド(指揮)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーンを継承した最高のモーツァルティアン、グルダのオーソドックスなモーツァルト解釈。

■ESOTERIC ならではのこだわりの Super Audio CD ハイブリッド・ソフト

オリジナル・マスター・サウンドへの飽くことなきこだわりと、Super Audio CD ハイブリッド化による圧倒的な音質向上で確固たる評価をいただいている ESOTERIC 名盤復刻シリーズ。発売以来 LP 時代を通じて決定的名盤と評価され、CD 時代になった現代にいたるまで、カタログから消えたことのない名盤をオリジナル・マスターから DSD マスタリングし、Super Audio CD ハイブリッド化を実現してきました。20 世紀を代表するモーツァルティアン、フリードリヒ・グルダがアバド/ウィーン・フィルという黄金の組み合わせで録音したモーツァルトの最も有名なピアノ協奏曲 2 曲を、世界初 Super Audio CD ハイブリッド化で発売いたします。グルダの名盤ではすでに「ベートーヴェン:ピアノ協奏曲全集」(デッカ原盤)と「モーツァルト:ピアノ協奏曲第 23 番&第 26 番」(テルデック原盤)を当シリーズで Super Audio CD ハイブリッド化しており、アーノンクールとのテルデック原盤がデジタル時代のグルダのモーツァルト録音の代表盤とすれば、今回のアバド/ウィーン・フィルとのモーツァルトはアナログ時代の代表盤といえるでしょう。

■グルダのモーツァルト

ウィーン出身の名ピアニスト、フリードリヒ・グルダ(1930-2000)は、1946 年のジュネーヴ国際コンクールで優勝し、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンを中心とする独逸音楽の解釈で並ぶもののないピアニストであると同時に、ジャズ演奏のみならず、ジャズやオーストリア文化のイデオロムを取り入れた独自の作曲作品でも知られた存在でした。多彩な活動を続けたグルダにとって、モーツァルトは重要な作曲家であり、生涯にわたってその作品を演奏し続けました。特に即興的とも思えるような装飾音の付加は、モーツァルトという作曲家のイメージに自由さと広がりを与えることに貢献しました。モーツァルトの録音については非常に慎重で、協奏曲に関しては、モノラル時代から録音しており、第 14・17・20・21・23・25・26・27 番の 8 曲が正規録音で残され、第 24 番も放送録音から CD 化されています。

■アバド/ウィーン・フィルとのモーツァルト

グルダがウィーン・フィルと初めて共演したのは 1953 年 12 月のことで、クレメンス・クラウスの指揮によるモーツァルトのピアノ協奏曲第 24 番でした。それ以来 1991 年まで 37 回の共演歴がありますが、その多くを占めているのはモーツァルトのピアノ協奏曲でした。アバドとの初共演は 1968 年 1 月のザルツブルク・モーツァルト週間でのことで、演目はやはりモーツァルトのピアノ協奏曲第 21 番。アバド/ウィーン・フィルとはその後 1970 年 8 月のザルツブルク音楽祭(第 20 番)、1973 年 6 月の定期とウィーン芸術週間(第 20 番)、1974 年 8 月のザルツブルク音楽祭(第 27 番)、1975 年 5 月の定期およびウィーン芸術週間(第 27 番)と共演を重ね、それらと並行するようにして 1974 年 9 月に第 20・21 番、翌 1975 年 5 月に第 25・27 番の計 4 曲をドイツ・グラモフォンに録音しています。

■オーソドックスの極み

シュタインと共演したベートーヴェン全集でもそうでしたが、このウィーン・フィルとの共演になるモーツァルトでも、グルダの解釈は文字通りオーソドックスの極みです。第 21 番に関してはこのほぼ十年前にハンス・スワロフスキー(ウィーン音楽院でのアバドの師)指揮ウィーン国立歌劇場管弦楽団とのコンサート・ホール盤がありますが、オーケストラ・パートに「通奏低音」風に忍び込み、オーセンティックとはとてもいえない奇矯な(ジャズ風な?)装飾でソロ・パートを彩った遊び心たっぷり、やりたい放題の解釈を聴かせていたのに対し、ここではカデンツァは自作(これも簡潔かつセンスのよいもの)を弾いているものの、アドリブ風の装飾も最小限にとどめ、シリアスかつ真摯にモーツァルトの作品の深奥に

迫っています。第 20 番もベートーヴェンを思わせるような峻厳さと立体的な響きがまず耳に入ります。そうはいってももちろん堅苦しさとは無縁であり、グルダならではの歌心溢れるリズムは健在で、20 世紀後半を代表するモーツァルト解釈として発売以来、カタログから消えたことがない名盤として聴き継がれています。アバドが指揮するウィーン・フィルも、ピリオドスタイルなどとは無縁の、20 世紀後半のスタンダードたる血の通った美しい響きでグルダのソロと協調しています。

■最高の状態での Super Audio CD ハイブリッド化が実現

レコーディングはウィーン・フィルのミュージックフェラインザールで行われました。ドイツ・グラモフォンがウィーン・フィルとの録音を本格化させるのは 1970 年代のベーム指揮の一連の録音からですが、このグルダの頃にはミュージックフェラインでの録音も常態化していて、グルダの肉厚のピアノを中心に大き目の音像でオーケストラがその周囲を取り囲む音作りも、オーソドックスかつシリアスな演奏には相応しいもの。エンジニアはヴェテランのギュンター・ヘルマンズが担っています。これほどの名盤ゆえにデジタルの初期から CD 化され、DG Originals で Original Image Bit Processing でのハイビット・リマスタリングが行なわれていますが、今回はそれ以来の、そして初めての DSD リマスタリングとなります。今回の Super Audio CD ハイブリッド化に当たっては、これまで同様、使用するマスターテープの選定から、最終的な DSD マスタリングの行程に至るまで、妥協を排した作業が行われています。特に DSD マスタリングにあたっては、DA コンバーターとルビジウムクロックジェネレーターに、入念に調整された ESOTERIC の最高級機材を投入、また MEXCEL ケーブルを惜しげもなく使用することで、オリジナル・マスターの持つ情報を余すところなくディスク化することができました。

■『これまでにないほど克明で揺るぎない表現』

「グルダの演奏は、アバドとウィーン・フィルのバックだけに、オーケストラ伴奏が大変充実している。木管がすこぶる重要な意義を持つモーツァルトの後期のピアノ協奏曲では、ウィーン・フィルをバックに起用したことが大きくプラスに作用している。グルダの演奏は「第 20 番」も尻上がりに好調だが、「第 21 番」では、ますますその天衣無縫ぶりを発揮しているし、アバドも流麗な伴奏を付けている。」
(推薦盤、『レコード芸術』1976 年 4 月号)

「モーツァルトの、しかも円熟の頂点に書かれたこれらの協奏曲から、作曲者晩年の恐ろしげな美しささえ弾き出しておきながら、一方でジャズに凝り、クロスオーバー風の作品を書いたりするグルダ。それにしてもこの 2 曲、二短調とハ長調という調性の違いからくる楽想の内的変化をこれまで見事に表現しようとは。」

(『クラシック・レコード・ブック 1000 VOL3 協奏曲編』、1986 年)

「ここでのグルダは、これまでにないほど克明で揺るぎない表現によってしなやかに構築しており、その演奏にいかにも充実したスケールを加えている。しかも晴朗な喜びを湛えた演奏は、あくまでも克明に磨かれ、きわめて多彩な変化とグルダならではの閃きに富んでいる。そうしたソロをアバドとウィーン・フィルがこれまた強く引き締まった感覚でくつきりと受け止め、しなやかかつ強靱で、精妙なニュアンスと陰翳の深い演奏によって、作品の魅力を余さず明らかにしている。」

(『ONTOMO MOOK クラシック名盤大全 協奏曲編』、1998 年)

「グルダが「本当に満足できる録音」として挙げているだけあって、この 2 曲を含むアバドと共演した 4 つの協奏曲はどれもたいへんにすばらしい。アバドの指揮と共感豊かな演奏を展開し、それぞれの多様な魅力をすこぶる明快に表現している。」

(『クラシック不滅の名盤 800』、1997 年)

「グルダのモーツァルトでは、線の太い、たくましい音楽性が貫かれ、その延長線上にはつらつとした音の戯れ、底力のあるドラマ、意外性ある発想などさまざまなものが揺るぎない力強さで描かれてゆく。モーツァルトの後期のピアノ協奏曲は器自体が極めて大きく、かつ深いものなので、グルダの意図がより明快に出ていると言えるだろう。」

(『クラシック不滅の名盤 1000』、2007 年)

[収録曲]

モーツァルト

ピアノ協奏曲第 20 番 二短調 K.466

[1] 第 1 楽章 アレグロ [カデンツァ: ベートーヴェン]

[2] 第 2 楽章 ロマンツェ

[3] 第 3 楽章 ロンド、アレグロ・アツサイ [カデンツァI: フンメル、カデンツァII: ベートーヴェン]

ピアノ協奏曲第 21 番 ハ長調 K.467

[4] 第 1 楽章 アレグロ [カデンツァ: グルダ]

[5] 第 2 楽章 アンダンテ

[6] 第 3 楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ・アツサイ [カデンツァ: グルダ]

フリードリヒ・グルダ(ピアノ)

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮: クラウディオ・アバド

[録音] 1974 年 9 月、ウィーン、ムジークフェラインザール

[初出] 2530 548(1976 年)

[日本盤初出] MG2506 (1976 年 3 月 1 日)

[オリジナル・レコーディング]

[プロデューサー] ライナー・ブロック

[ディレクター] カールハインツ・シュナイダー

[レコーディング・エンジニア] ギュンター・ヘルマンズ

[Super Audio CD プロデューサー] 大間知基彰(エソテリック株式会社)

[Super Audio CD リマスタリング・エンジニア] 杉本一家(JVC マスタリングセンター(代官山スタジオ))

[Super Audio CD オーサリング] 藤田厚夫(有限会社エフ)

[解説] 諸石幸生 黒田恭一

[企画・販売] エソテリック株式会社

[企画・協力] 東京電化株式会社

エソテリック独占販売

エソテリック特約店にてお求めください。エソテリック特約店につきましては弊社ホームページの「製品展示・販売店のご案内」または「AVお客様相談室」へお問い合わせください。

ホームページ 製品展示・販売店のご案内 <http://www.esoteric.jp/support/shop/>

AVお客様相談室

0570-000-701(ナビダイヤル) PHS・IP電話からは Tel 042(356)9235/Fax 042(356)9242
受付時間: 9:30~12:00/13:00~17:00(土・日・祝日・弊社休業日を除く)